

次号予告

- 特集 ダウン症と理学療法・作業療法
 ダウン症の成因と診断.....都立児童相談センター 上 出 弘 之
 ダウン症の知能・性格の特徴と育て方...筑波大学心身障害系 池 田 由紀江
 ダウン症幼児の運動発達の促進
 (理学療法の立場から).....南小倉病院 佐々木 直 美
 ダウン症幼児の運動発達の促進
 (作業療法の立場から).....川崎市中心障センター 長谷川 元
 成人ダウン症患者の現状と課題
 (職業・教育・社会).....日向弘済学園 中 村 健 二
 とびら リハビリテーションチームに対する期待.....帝京大学 岩 倉 博 光
 講座 教育学シリーズVI 教育評価(2).....玉川大学 沼 野 一 男
 プロGRESS CP 早期治療における OT, ST の役割 (1).....聖母整肢園 梶 浦 一 郎
 インテグレーション.....筑波大学心身障害系 三 沢 義 一
 Recommended Readings (理学療法部門) 脊髄損傷.....横浜市大病院 鶴 見 隆 正
 (作業療法部門) 保健・福祉・教育・建築
 関係で読んでおくといふもの...都心障センター 寺 山 久美子
 文献抄録
 資料 第13回理学療法士・作業療法士国家試験
 一模範解答 (IV) 1978年度

編集後記

今月号の特集の、蓮村氏による論文で、全職員のリハビリテーションに対する認識を高めることの重要性、専門職種間の役割分担及び、相互連絡の工夫、そのための研修の徹底等、正に、リハビリテーション施設で我々がまだ果せないでいる課題の実践が紹介されているが、老人福祉行政上の大きな矛盾と問題を抱えた十年間の経験から着々と問題を解決してきた結果、107 名中寝たきりは5名、褥創患者は1,2名のみという素晴らしい実績をあげておられ、心から敬服している。

特養に PT・OT が関わる場合に、常勤か非常勤かでその役割に差が出てくる。香川氏は、ほとんどが非常勤としての関わり方である現状における問題点を提示しているが、施設側の蓮村論文、PT 側の香川論文の双方を参考にして、非常勤のアプローチの再検討が必要な時期ではないだろうか？

松下論文では、“真に老人の役に立つ OT” を追求している著者の真摯な態度が

にじみ出ている。寮母、看護婦の積極的な協力なしでは成功しないとして、寮母と OT が一体となって老人の生活場面に溶け込んで相互に効果をあげているというすばらしいチームワークの実践例の紹介もなされている。

米田氏の紹介している板橋区の脳卒中在宅リハビリテーション組織体系は、ユニークなものとして注目されている。

また、菊田論文から、読者はきっと、S. W. の重要性を再認識させられることと思う。

在宅のリハビリテーションで、山崎論文で紹介されている方法は、保健婦訪問が中心となり、必要に応じ医師と連絡をとりながら PT と一緒に訪問 (年5回位) するもので、評価・目標設定のもとに進められており、訪問サービスのあるべき姿のように思われる。

この特集を機に、関連職種のより深い理解と、“真に患者に役立つチームワーク” について考えるきっかけになればと願っている。
 (福屋 靖子)

<編集顧問>

天 児 民 和
 九州労災病院長
 五味 重 春
 筑波大学心身障害学系教授
 砂 原 茂 一
 国立療養所東京病院長
 津 山 直 一
 東京大学教授・整形外科
 水 野 祥太郎
 川崎医科大学学長
 (五十首頃、以下同じ)

<編集委員>

上 田 敏
 東大リハビリ部
 荻 島 秀 男
 わらび診療所
 大喜多 潤
 兵庫県リハセンター
 鈴木 明 子
 府中リハビリ専門学校
 寺 山 久美子
 都心障センター
 奈 良 勲
 有馬温泉病院
 福 屋 靖 子

松 村 秩
 都養育院リハビリ部

<編集同人>

大 橋 博
 大 丸 幸
 金 子 翼
 鎌 倉 矩 子
 紀 伊 克 昌
 駒 沢 治 夫
 佐 藤 章
 佐 藤 馨
 嶋 田 智 明
 高 橋 正 明
 武 富 由 雄
 谷 岡 淳
 富 岡 詔 子
 中 屋 久 長
 藤 沢 しげ子
 松 本 妙 子
 丸 谷 隆 明
 矢 谷 令 子
 山 下 隆 昭
 和 才 嘉 昭
 (担当 細田・西塚)